

# ディケンズ評価の定着と発展 1960-1980

西 條 隆 雄

## 1 本来的な評価の定着

レズリー・スティーヴンは『英国人名事典』(1888)に「もし文学的名声が無教養な人々の人気で計られるものであれば、ディケンズはイギリス小説の中で最高の地位を占めるはずだ」と書いたが、これはディケンズの死後におこった反動意見を要約するものであった。この歪んだディケンズ評価は、ほぼ100年を経て、フィリップ・コリンズによって大幅に修正され、ようやく狂いのない作家像が確立した。コリンズは『ブリタニカ百科事典』(1974)において、「ディケンズは英語圏の小説家のなかで最大の小説家」であり、創作の深さと広がり、そして技法の新しさにおいては比類のないすばらしさを持つ作家であると明記した。ディケンズの文学的成功と作品のかずかずの魅力、そして現在の批評界における評価の高さを的確に述べ、彼は19世紀文壇の牽引力であり、19世紀英国社会の良心の代弁者であったことを明らかにした。1960年から1980年の間にディケンズの評価は大きく変わり、ディケンズ研究は飛躍的に進展した。

評論する側の時代知識の欠如ゆえに、正しい作家像が捉えられないことを憂えたフィリップ・コリンズは、自ら「リテラリー・ヒストリアン」(=文学的歴史家)と称し、ハンフリー・ハウスの実証的研究方法を引き継いで、ディケンズの著作を同時代の膨大な歴史的資料を用いて裏付けることに精力を注いだ。『ディケンズと犯罪』(1962)はディケンズの生涯と作品をしっかりと踏まえつつ、それと当時の犯罪および犯罪についての考え方、さまざまな事件、刑法改正とを関係づけ、豊富な文献を用いて検証した古典的名著であった。これが30歳代終わりの業績、つづいて前作以上に自信を込めた『ディケンズと教育』(1963)

を著し、ディケンズが生涯にわたって持ちつづけた関心事を伝記と社会史の中から余すところなく解き明かした。「余すところなく」というのが彼の研究の一貫した態度で、その後につづく大著——『ディケンズ——批評の遺産』（1971）、『公開朗読台本全集』（1975）、および『ヴィクトリア朝小説——研究の手引き続編』（1978）の「ディケンズ」の項目——は、広範な文献と資料を駆使してディケンズをとらえる、厳密な研究から生まれたものであった。『ブリタニカ』のディケンズ評価は、もはや時代の偏見や個人的感情とは無縁の、正鵠で揺るがぬ評価であった。

ライオネル・スティーヴンソン編『ヴィクトリア朝小説——研究の手引き』（1964）によれば、ディケンズについて博士論文を書いた人の数が1930年代には7人、1950年代には32人であったが、ジョージ H. フォード編『ヴィクトリア朝小説——研究の手引き続編』（1978）では、1974年の3ヶ月間だけで20人、そして研究論文は3ヶ月ごとに100あるいはそれ以上が出版されているという。つまり、1960年から1970年にかけてディケンズ研究は空前の広がりを見せ、それを証明するかのようにディケンズ研究専門の研究誌がつぎつぎに発刊された。また『ディケンジア』の総索引が1974年に完成すると、この雑誌に載せられた70年におよぶディケンズ研究の全てが容易に目に触れることとなり、研究はより緻密に、ディケンズ像はより巨大になった。ディケンズ研究が加速的に進んだ理由には、この時期にヴィクトリア朝研究が活発になり、小説を歴史的コンテクストの中で読む傾向が定着したことがあげられる。それによって、ディケンズは他のどの作家よりも文学的に、歴史的に、社会的に、研究者の興味をひきつけたのである。1960年代のはじめ、ジョージ・フォードは『ディケンズ批評——過去、現在、未来の方向』（1962）というシンポジウムのなかでこう述べている。「ヘンリー・ジェームズの批評理論やプルースト、ジード、ジョイスの作品に親しんでいる読者は、これまでディケンズ小説を評価するさいに、明らかに有利な立場にあった。しかしディケンズを評価するには、ラスキン、アーノルド、サッカレー、G. W. M. レノルズの著作にも親しみ、またヴィクトリア朝の新聞・雑誌、そして説教にも通暁した学問ある読者が必要だ。なぜならディケンズはこれらすべてを読んでいるからだ」（p. 21）と。ディケンズ理解には、時代および時代背景の膨大な知識が必要となった。同時に、文学理

論でディケンズを裁断しても、作家像を正しくつかむことはできないことがはっきりしてきた。

1960年から1980年の間の特徴は、作家論、作品論以外に、テキストの校訂、書簡の集大成、それに主要作品以外の作品および雑誌記事の編集が相次いでスタートし、ディケンズ想像力の源泉の探求や、ディケンズと演劇、小説と挿絵の関係にも関心が広がり、ディケンズ研究の土台が強固に築きあげられたことである。本格的な研究と評価の時代と呼んでもいいであろう。日本で本格的な研究書が出はじめるのは、この時期である。

## 2 テキスト校訂

1953年、おそらくディケンズ研究において手稿、創作メモ、校正刷りの書き込みに着目する人のなかったときに、シルベール・モノはそれらを用いてディケンズが小説を入念に組み立てる職人であることを証し、『小説家ディケンズ』を学位論文として世に送った。一方対岸の英国では、バットとティロットソンが『ディケンズの創作過程』(1957)によって同じく手稿・創作メモ・校正刷りを丹念に追い、彼が即興的な作家ではなく、さまざまな作品、とりわけ『ドンビー父子』においては周到に構想を練った事実を裏づけた。

作家としてのディケンズ像を大きく修正した上記の著書に次いで、ティロットソンはそれまでまちまちであったテキストの校訂作業に入る。これはいくつかの異本を厳密に照合する単調な仕事であるが、これによってディケンズが登場人物の名前や年齢を改変し、罵言を削除し、台詞の改善や削除を行なったことが確認された。また、ディケンズが校正刷りに手を加えるときには、手稿にはほとんど目を通していなかったこともわかった。1966年、さまざまな版の「序」に加え、『ベントリーズ・ミセラニー』誌の月刊連載から10年後に出された分冊本の表紙絵も加えて『オリヴァー・トゥイスト』の校訂本がオクスフォード大学出版局から出ると、つづいて1972年には『エドウィン・ドルードの謎』の校訂本が出版された。ここには、開巻早々に出てくる“Town”という語が、長らく“Tower”に読み違えられていた事実が発見された。

作業は順調に進み、『ドンビー父子』(1974)、『リトル・ドリット』(1979)、『デイヴィッド・コパフィールド』(1981)が相ついで校訂・出版され、「クラ

「ロンドン版ディケンズ」は、決定版としての評価を手にした。一方アメリカでは、値段の高いクラレンドン版に対抗し、校訂を経たテキストに加え、創作メモ、当時の関係資料、作品解説、書評や評論の抜粋を載せ、値段も教材として使える程度に抑えたノートン版が企画され、『ハード・タイムズ』(1966)、『荒涼館』(1981)、(後には『デイヴィッド・コパフィールド』[1990]、『オリヴァー・トゥイスト』[1993]、『大いなる遺産』[1999])が出版され、好評を博している。

### 3 書簡集の編集

テキスト校訂につづいて一大事業を起こしたのは、ディケンズ書簡の編集であった。フォースターの編んだ3巻本(1874)は日付の間違が多く、大部分は切り貼りして『ディケンズ伝』に使用されていた。1938年、世界中をくまなく探したウォルター・デクスターが『ノンサッチ全集』のなかにディケンズ書簡集3巻を組み入れたとき、書簡の総数は5,811通であった。しかし、この3巻本は日付に間違いがある上に、内容面でもオリジナルの書簡と照合されていないので、最上の資料でありながら、信頼性に欠けるところがあった。そこでハンフリー・ハウスは、ディケンズの全書簡を徹底的に集めこれを編集するという、無謀とも思える仕事に取りかかった。第1巻すら完成しない1955年に彼が亡くなると、残る仕事は夫人とグレアム・ストーリーに引き継がれた。全部で11,956通にのぼる書簡——第1巻では1,059通のうち722通には日付がなく、作家の作業日程から割り出したり、紙質の違いから特定する難作業が続いたが、やがてディケンズの署名のしかたの違いによって特定する方法を発見した——の第1巻(1820-38)が1965年、第2巻(1840-41)が1969年、第3巻(1842-43)が1974年、第4巻(1844-46)が1977年、第5巻(1847-49)が1981年に出版された(この世紀の大事業は、数人の編集者の手を経て2002年に全12巻でようやく完成を見た。その後新たに発見された書簡は順次、『ディケンズ』に掲載される予定である。半世紀以上にわたってその存在を誇った『ノンサッチ書簡集』はこの時点で役割を終えた。)書簡の一つ一つは、当時の文献・資料を用いて詳しい注釈が施されているので、研究資料として非常に使いやすく、ハウスの編集方針の先見性が高く評価される。また、付録には『ボズのスケッ

チ集』のそれぞれのスケッチの掲載年月日と掲載紙、ディケンズの蔵書リスト、出版契約書、国際著作権問題についての文書、文芸ギルド設立趣旨とその基金集めのための興行プログラムなど、有益な資料がたくさん載せられている。

#### 4 その他の編集本

『ディケンズのスピーチ集』(1960)、『ジョウゼフ・グリマルディ回想録』(1968)、『全演劇および詩集選』(1970)、『凍れる海』(1971)、『公開朗読台本全集』(1975)、そして『ハウスホールド・ワーズにおけるディケンズの未収録記事』(1968)もまた、この時期に編まれた。

多くの編集本のなかでも、ディケンズが公開朗読で用いた台本は存在場所が定かでなく、それを編集することは長らく絶望視されていた。これがコリンズの想像を絶する努力でことごとく集められ、ディケンズの朗読活動のすべてに関する詳細な解説を添えて出版された。台本の作成、異本の校訂、朗読回数、未使用台本のリストと本文、『憑かれた男』のように完成を見ぬままに投げ出されたものや、『デイヴィット・コパフィールド』のように8年を費やして長編を一つの物語に作り変えた台本など、朗読台本の作成から実際の朗読にいたるまでの活動の詳細が浮び上がった。これによって、ディケンズ晩年の、創作と並ぶ大きな活動の跡を克明に追うことができるようになった。

同様に絶望視されていたのは、雑誌記事の執筆者を特定する作業である。しかしハリー・ストーンはプリンストン大学に『ハウスホールド・ワーズ誌編集原簿』があることを知っていた。この原簿は W. H. ウィルズが執筆者に支払った原稿料を丹念に記載していたもので、彼の死後、家族の手によって流出したものである。これをもとに彼はディケンズの手記を拾い出し、詳しい注をつけて『未収録記事』を出版した。つづいてアン・ローリーはこの『編集原簿』を編集して『ハウスホールド・ワーズ誌の記事と寄稿者一覧』(1973)を出版し、全記事のリスト・アップとともに390名におよぶ寄稿者についての詳細な情報を書き加えた。クリスマス特集号の寄稿者の特定も、デボラ・トマスによってなされた(1973-74)。

ディケンズが編集したもう一つ別の雑誌『オール・ザ・イヤー・ラウンド』誌については、ハンティントン図書館にあった書簡の束を研究していたコリン

ズが研究成果をエラ・オッペンランダーに託し、彼女が調査・編集を継続して『オール・ザ・イヤー・ラウンド誌の索引と寄稿者リスト』（1984）を出版した。この手紙類も W. H. ウィルズがとどめおいていたものらしい。こうしてディケンズ研究の行く手を阻む大きな障壁が取り払われた。

## 5 批評のアンソロジー

ディケンズ批評の歴史を綿密にたどった書物はジョージ・フォードの『ディケンズと読者たち』（1955）である。この書物は、ディケンズがどのように受け取られ、否定され、復活するかを、それぞれの時代と批評家に語らせる体裁で書き進められた。リチャード・オールティックの『英国の一般読者』（1957）と合わせて読めば、ディケンズの生きている間に彼の小説が読書界にもたらした衝撃をより正確に捉えることができよう。この著書をきっかけに、ディケンズ批評のアンソロジーがいくつか編集された。たとえば、『ディケンズの批評家たち』（*The Dickens Critics*, 1961）、『ディケンズと20世紀』（*Dickens and The Twentieth Century*, 1962）、『ディケンズ評論集』（*Dickens; A Collection of Critical Essays*, 1967）、そして『ペンギン評論集——ディケンズ』（*Charles Dickens: A Critical Anthology*, 1970）がある。しかし、この種のアンソロジーは後年のものほど新しくかつ包括的で、『ペンギン評論集』は批評の変遷を3つの時期にわけて整理しており、もっとも利便性の高いアンソロジーである。

その『ペンギン評論集』は全3部からなり、第1部は75編におよぶディケンズの序文、スピーチ、書簡それに「自伝の断片」を年代順に並べ、その間に当時の評論を挟んでいる。ディケンズの作家としての確信が育ってゆく過程を見ることができ、また彼が時代の代弁者であることがよく把握できるよう配慮・工夫されている。第2部は、ディケンズの死後から1940年までの「ディケンズ否定の時代」の評論を過不足なく掲載して利用の便に供している。第3部は1940年から1968年までのあいだの、ディケンズの芸術的名声を高める論文・著書を、抜粋の形ではあるがほとんど網羅している。批評の歴史を見るには便利な論集で、評価は高い。

なお、アンソロジーには医学・心理学で用いられる用語を冠した「ケース・ブック（症例集）」という個別作品論集も編まれている（『荒涼館』[1969]、

『ハード・タイムズ、大いなる遺産、互いの友』[1979])。

しかし、かずかずのアンソロジーの中でもとりわけ傑出しているのは『ディケンズ——批評の遺産』(1971)である。これはなぜ編集しなければならなかったか、その目的と意義を明確に教えてくれる。フォードはディケンズ批評の変遷を膨大な資料を駆使してたどったが、19世紀の書評や評論がどのような類のものであったか、そしてその不十分さゆえにディケンズ評価がどう歪められていったかは示してはいない。フィリップ・コリンズの『ディケンズ——批評の遺産』は、ディケンズが生きていた時代の評論の肯定と否定の双方を偏ることなく収録しながら、そこにどのような欠陥があったかを指摘している。

コリンズの出発点はディケンズを「国民の友」、彼の死を「国家的損失」ととらえる当時の人々のディケンズ観を中心にすえ、作品の人気と魅力の大きさを語るとともに、その一方で彼を誹謗する評論家の批評方法がなぜ否定的なものに偏っていったかを探る。一時、ディケンズの作品を低俗な大衆小説と見る傾向があったが、これに対してはヘンリー・ジェームズの回想録を引用し、人々が戯曲化されたディケンズの作品を劇場で見たこと、しかもそれを見る人々は無学の人が多かったことと結びついていたと述べ、更には、小説につけた挿絵が人々に過度の単純化を促すことになったからだと指摘する。

より重要な指摘で、ほとんどのディケンズ研究者が見落としていた事実は、ディケンズを悪しざまに論じる評論家たちが、彼の文学的名声の高い作品ではなく、マイナーな作品のみを読んで彼を論評していたということである。たとえば1840年代に『タイムズ』紙は、『マーティン・チャズルウィット』などの長編を眼中におかず、不思議にも『クリスマス・ブックス』だけを取り上げて、ディケンズに「書き急ぎ」をしないようにとの片手落ちな論評を平気でやってのけているし、名作の誉れ高い『ドンビー父子』はタイトルすら論評の中に出てこない。『サタデー・レビュー』誌にいたっては、編集長ジェームズF. スティーヴンが『リトル・ドリット』を激しく非難し、ディケンズを軽薄文学の類に入れる。スティーヴンがこの作品を非難する理由は、作品中に出てくる「繁文縟礼省」が官僚であった自分の父を戯画化していると考えたからであって、彼がつぎつぎに書いた評論は、コリンズによると「学部生の偶像破壊」「貴族の大衆侮蔑」程度の粗雑なものだという。ちなみにスティーヴン家には代々ディケ

ンズ非難の血が流れているので、作品・作家論にこの一家の人々の書いた評論を引用するときには注意が必要である。ともかく、個人的感情を交えた『サタデイ・レビュー』誌の書評には、『ブラックウッド』誌からも苦言が出ていたほどであった。

『クォーターリー・レビュー』誌は、(総じて「クォーターリー」と名のつく季刊誌はすべて、ディケンズ評論に関するかぎり誰の目からも批判を避けることができないが) 当時の最大作家の作品の中で『アメリカ紀行』だけを取り上げて長々と論評し、ほかの作品には全く触れないという不可解な態度を見せているし、『エディンバラ・レビュー』誌も同様にディケンズの文学を軽薄な部類と考え、一貫して評論対象から外している。「英国の文芸誌は使命を果たしておらず、文化的軽薄さを露呈しているではないか」とコリンズは批判する。ディケンズ評価を誤ったものにする原因は、批評家たちのおざなりな批評態度にあったことを、コリンズの慧眼は見落とさない。否、これは膨大な評論すべてに目を通して編集したからこそわかった発見であった。ディケンズは、幸いにして評論を無視できたからよかったものの、こうした評論をいちいち気にしていれば創作の筆は間違いなく折られていたであろう。

## 6 作家・作品研究

この時期に著された研究書は、1960年以前に比べると驚くほど多数に上るので、ここでは取捨選択しながら出版年の順にしたがって取り上げ、寸評を加えたい。ディケンズ芸術に対する見方は急速に深まり、研究は多方面に広がる。

- (1) マーカス『ディケンズ——「ピクウィック」から「ドンビー」まで』(1965)

批評家の目が後期作品に偏りがちな中で、初期作品にこれだけの批評的関心を向けたことはすばらしい。マーカスは、フロイドとマルクスに造詣が深く(彼の *Engels, Manchester, and the Working Class* [1974] は高評)、広い視点からディケンズ作品を見ているのがいい。

- (2) テイラー・ステア『ディケンズ——夢想家の視座』(1965)

ディケンズの執筆態度はフロイドのいう夢の作用に近いとし、この理論を後期の暗い6小説に応用し、作品がどのように構成されているかを解明する。



## (3) ハーヴェイ・サックスミス『ディケンズの語りの技法』(1970)

作品のテキストに注意を注ぎ、手稿、校正刷りに丹念に目を通した書物で、本書によって、ディケンズが直感的に筆を取るとか、夢や強迫観念を書く作家ということではできなくなった。彼は意識的な芸術家で、読者に与えたいと思う効果をよく考え、そのために手段を使ったとする。語りに力をおいた論考で、社会小説家としての姿がやや甘くなっている。

## (4) ダレスキ『ディケンズ—類似の芸術』(1970)

さまざまな人物や概念を「類似」やパタンによって結び発展させてゆく作家の技法を捉え、愛と金銭といったテーマがどのように展開され深められてゆくかを8つの小説において追い、ディケンズの作家としての発展を跡づける。

## (5) ロバート・パートロウ編『小説の職人ディケンズ—創作の技法』(1970)

マイケル・スレイター編『1970年のディケンズ』(1970)

A. E. ダイソン『比類なきディケンズ—彼の小説の読み方』(1970)

ジョン・ルーカス『悲しい人—ディケンズ小説研究』(1970)

アンガス・ウィルソン『ディケンズの世界』(1970)

没後100年記念の年には、研究書がずいぶん出た。しかしアンガス・ウィルソンの『ディケンズの世界』は、そのなかでとくに優れている。これは全生涯を芸術にささげた作家像を念頭におき、作家の飛躍的成長の跡をたどる小説家による小説家論で、芸術家としてのディケンズ像をしっかりと捉えた、説得力のある著書である。

ウィルソンは、作品の評価は回想する立場と、読む立場の双方から同時におこなわれなければならないと考える。そうすることによって、本当にいい作品と、余計なことば・無駄な文節の混じる作品とが区別できるからだという。ディケンズの初期作品は全般的に即興の感があり、その芸術世界はジャーナリズムに近いが、『バーナビー・ラッジ』と『チャズルウィット』からは社会像の形成が見られはじめ、『ドンビー』にいたってそれが完成するとともに、人間がはじめて人間として描かれ、内的変化を経る主人公が登場する。『デイヴィッド』は経験が詩に昇華されたすばらしい作品であるとしながらも、これは「ディケンズの最も内奥を照らすはずの小説が、もっとも浅薄でもっとも上滑りになった小説である」(p. 215)と述べる。そこにはディケンズ自身が持つ、より深

い、悪魔的なものが、主人公デイヴィッドには欠けているからだと説明する。

『荒涼館』以降『エドウィン・ドルードの謎』にいたるまで、ウィルソンは作品ごとの有機的なつながりと、芸術の完成へ向かって飛躍的に成長していく作家の姿を克明に跡づける。社会小説家としては、『荒涼館』『リトル・ドリット』『大いなる遺産』において完成したと見る。『互いの友』は非の打ち所のない社会小説だが、読み返してみると意味のない文章、余計な文節が散見するので以前のものより劣ると判定する。しかしそのような文章が混じっている真の理由は、ディケンズがまるで予言するかのように未来の社会像をとらえているからであって、ここにはヘンリー・ジェームズの後期ヴィクトリア朝世界の通俗社会がすでに明確に捉えられていることに驚く、とウィルソンはディケンズの慧眼を称える。本書は、芸術家としての成長を的確に捉えていることと、幼年時代のオブセッションが作り上げる作家の内面を扱う第1章がすばらしく、それに母親像の修正およびディケンズの女性観の変遷を扱っているのが新しい。

#### (6) リーヴィス夫妻『小説家ディケンズ』(1970)

リーヴィス夫妻の『ディケンズ』にF. R. が載せた「リトル・ドリット論」は、彼の書いたディケンズ論の中ではもっとも優れた論文である。この作品は「世界でもっとも偉大な小説のひとつ（もちろんディケンズの最高作）である」とし、詩的なすばらしさとヘンリー・ジェームズにも匹敵する内面描写の深さをたたえた芸術作品であると断じた。彼はここにおいて『大いなる伝統』にディケンズを加えなかった大失敗を補ったかに見える。しかし論じている内容は別として、この論文にはあまりに頻繁に“but”が繰り返され、はたしてこれが批評文の模範であろうかと首をひねるほどのひどい走り書きである。Q. D. のほうは評価が一定しているものの、F. R. のほうはディケンズを卑下した過去の失敗にどこまでも責められているようだ。

#### (7) ジョン・ケアリー『暴力的想像力』(1973)

ディケンズ批評家の間で物議をかもしているこの書物は、『骨董屋』のハエにはじまり、ディケンズの細部ばかりをつぎつぎに取り出して論じた珍しい批評書である。ケアリーはディケンズを喜劇作家として捉えているのはいいが、「ディケンズは喜劇の力が強すぎて、そのため劇的なものをつかむことができない。だから書いたものは早晩浅薄なメロドラマに墮してしまう傾向がある」

と述べ、一旦ユーモアが消えれば彼の想像力はせいぜい2つか3つの文章しかつづかないと蔑む。また、ディケンズに内的世界のあることを断固否定し、イーディス・ドンビーやエステラの複雑な内面には目を向けず、表面的な類型的人物としてしか捉えない。ケアリーの捉えるディケンズは、ディケンズを注意深く読んだ人から出てくるものではない。「どんな子どもも、ピプチン夫人に対してポールのように語りかけることはない」と述べるが、これも彼の憶測にすぎない。アグネスの手が天井を指しているのを、二階のベッドを指している、つまり性的欲求不満を示していると解釈するのは、本書の執筆目的がディケンズを揶揄するためではなかったのかとすら思われる。ともかくオクスフォード大学詩学教授の無責任なジョーク集とも受け取れる本書に対する批判は厳しい。コックシャットが『ディケンズの想像力』でかかげた課題、「これほど粗雑な精神の持ち主がどうして芸術の巨匠になれたのか」(*The Imagination of Charles Dickens* [1961], p. 11) に似た発想で筆を執ったのかもしれない。

(8) ジェイムズ・キンケイド『ディケンズと笑いのレトリック』(1967)

ハリー・ストーン『ディケンズと目に見えない世界』(1979)

ハリー・ストーンによれば、お伽的要素はディケンズの作家活動が進むにつれて大きくなり、円熟した小説では全体を統括する力となって『ドンビー』『デイヴィッド』においては大きく成功していると述べる。しかし、それ以降の小説については何も触れていないので、やや不満が残る。

(9) アレグザンダー・ウェルシュ『ディケンズの都市』(1971)

F. S. シュワルツバック『ディケンズと都市』(1979)

都市の見方が作品を通してどのように変わってゆくかを捉えた書物である。シュワルツバックによると、初期の作品では田園と都会(悪夢のロンドン)が対立的に捉えられているが、『ドンビー』になるとそのような単純な図式は消え、『荒涼館』『ドリット』では腐敗し、人々を閉じ込める都市の姿になる。しかし、『大いなる遺産』では、単なる腐敗の都市ではなく、活力と機会を与える場所となっており、『互いの友』では再生の力を与えるところとして捉えている。面白いが、作品解釈のためにロンドンを便宜的に捉えてはいないだろうか。

(10) マルコム・アンドルーズ『ディケンズのイギリスおよびイギリス人観』  
(1979)

マイケル・スレイター『ディケンズのアメリカおよびアメリカ人観』  
(1979)

図版を多用して1842年および1867-68年にディケンズがアメリカを訪れたときの様子を解説したもので、図版が実に有難い。

## 7 多様なディケンズ研究

ヴィクトリア朝研究が盛んになったこの時期、ディケンズに対する関心はおどろくほど高まり、「ディケンズ産業」といわれるほど出版物が相次ぎ、しかも多方面にわたるディケンズの姿が描き出された。ここではそれぞれを分類し、書名のみを掲げるにとどめたい。

### (1) 小説と出版

ゲットマン『ヴィクトリア朝の一出版社——ベントリー社の研究』(1960)

A. C. クーリッジ『連載小説家としてのチャールズ・ディケンズ』(1967)

ロバート・パトン『ディケンズと出版社』(1978)

### (2) 小説と挿絵

ジョン・ハーヴェイ『ヴィクトリア朝小説家と挿絵』(1970)

ヒリス・ミラー および D. ボロウィッツ『チャールズ・ディケンズとジョージ・クルークシャンク』(1971)

マイケル・スタイグ『ディケンズとフィズ』(1978)

ブキャナン＝ブラウン『フィズ——ディケンズ世界の挿絵画家』(1978)

ジェイン・コーエン『チャールズ・ディケンズと当初の挿絵画家たち』  
(1980)

ジョン・ハント編『文学と絵画の出会い』(1971)

### (3) ディケンズの英語・文体

G. L. ブルック『ディケンズの言語』(1970)

スタンリー・ギアソン『チャールズ・ディケンズの作品の対話における音と記号』(1967)

ウィリアム・アクストン『芝居仲間——ディケンズの見方、文体、大衆演劇』

(1966)

ギャレット・スチュワート『ディケンズと想像力の試練』(1975)

(4) ディケンズと他作家との関係・影響

マーク・スピルカ『ディケンズとカフカ』(1963)

マイケル・ゴールドバーグ『カーライルとディケンズ』(1972)

ウィリアム・オディー『ディケンズとカーライル』(1972)

N. M. レイリー『ドストエフスキーとディケンズ — 文学的影響の研究』  
(1973)

パール・ソロモン『ディケンズとメルヴィル』(1975)

ハーベッジ『一つのカ — シェイクスピアとディケンズの類似性』(1975)

(5) ディケンズの文学土壌

アール・デイヴィス『火打ち石と炎』(1963)

ルイ・ジェイムズ『労働者のための小説 — 1830-1850』(1963)

ルイ・ジェイムズ『イギリス大衆文芸1819-1851』(1976)

## 8 ディケンズ研究雑誌の刊行

『ディケンズ・スタディーズ』(エマソン・カレッジ, 1965-69),

『ディケンズ・スタディーズ・ニューズレター』(南イリノイ大学, 1970-)

『ディケンズ研究年報』(南イリノイ大学, 1970-)

## 9 個別作品論

ディケンズ研究の広がりや深まりに呼応して、個々の作品のよみ方は歴史的・文化的な背景の中で作品固有の姿をとらえる態度が顕著になり、作家の用いることばの中に作家の本質的なもののみかた、人物造型、社会像の形成のパターンを読みとっていかうとする。ここでは興味を引く論文を4点挙げてみたい。

(1) Steven Marcus, "The Blest Dawn" in *Dickens: From Pickwick to Dombey* (1965).

『ピクウィック』が「先例のない現象」を引き起こした理由を考察した論文。マーカスはそれを次のように説明する。(ア) 小説の伝統に新しい時点を画したこと、つまりディケンズが18世紀の随筆・小説の場面を借用しながら、その卑

猥さ、粗雑さをとり除いてそれを同朋意識や安心感に包まれた場面に変えていること。(イ) 個人体験を新しい形に書き直し、ピクウィックとサムの関係、サムとトニーの関係を小説の大きな興味に仕立て、自分と父の関係を明確に理想化していること。サムは従者であることを超え、主人に現実世界を案内する人物になっている。そして、(ウ) 社会の不正や邪悪はピクウィックおよび随行員の道徳的な生き方と関係づけられており、主人公の道徳的影響に素直に応じる人物たちは彼の博愛行為をそのまま受け入れる。したがって、この調和世界においては、不正や邪悪は社会の脅威にはならない。悪人が蘇生するにはピクウィックを一目見れば済む。そうした意味で『ピクウィック・クラブ』は神の国に手が届き、しかも地上において神の国に似たものを作り上げることができると主張する小説で、この楽観主義が作品の世界的評判を説明する、と捉える。

(2) Ian Milner, "The Dickens Drama: Mr. Dombey," in *NCF* 24 (1970).

ドンビー氏の内的変化をみごとに説明する論文。ドンビー氏の内面の描き方は、分析を通して読者に語るという形をとらず、彼の心の中にうごめくさまざまな情念をそのまま映し出し、読者に見せる形をとる。この描き方は劇作家のそれであって、内面の自己およびさまざまな動機を行動によって示し、劇的な内面投影の場面、たとえば父の部屋を訪ねて拒絶されたフローレンスのこわばった表情(18章)とか幾多の足跡を刻む階段の場面(59章)、を作品中にいくつか用意することによって、ドンビー氏の内的変化を漸層的に展開してゆく。筆者はディケンズを、人間の普遍的動機に鋭く目を注ぐ、生まれながらの劇作家であると捉える。

(3) Bernard N. Schilling, "Micawber's Difficulties," "Micawber's Abilities" in *The Comic Spirit: Boccaccio to Thomas Mann* (Detroit: Wayne State UP, 1965).

ミコーバーをイギリス文学の大喜劇人物として捉え、失敗の人生を喜劇として演じるミコーバーの性格、多芸多才、柔軟性、適応性を分析する。ことにミコーバーの詩的表現に関しては、修辞、引用、ラテン語派生の抽象語句、イメージ、比喩にわたって詳しく吟味し、困窮との戦いがミコーバーをいかにすばらしい雄弁家にし、彼に誇りと詩的喜びを与えているかを指摘する。また、ミコーバー夫人のものの考え方と夫への忠誠に対してもまた、彼女の一本調子

とその限界を面白くかつ適切にとらえている。

- (4) Eugene F. Quirk, "Tulkinghorn's Buried Life: A Study of Character in *Bleak House*." in *JEGP* 72 (1978).

ほとんどの批評家がタルキングホーンを表層のみでとらえ、それゆえにディケンズ芸術を不当に評価するが、この弁護士のきわめて制約された描写を綿密に追うことによって、彼の性質、考え方、さまざまな動機を浮かび上がらせる緻密な論文。寡黙な描写のなかで、“blinds”, “whether/or” 構文, “it may be…” の表現に着目し、ここから弁護士の権力欲、秘密保持熱、上流階級嫌悪を読みといてゆく。かくて彼はデドロック夫人に対して支配権を握り、そのため夫人には影がさしはじめる。ディケンズの計算と巧みさ、それに “maggots in nuts” と書いて、弁護士というものの正体とそれが貴族の館に及ぼす運命をすらほのめかす。この人物こそはディケンズの円熟した芸術の結晶だととらえ、従来の単純化された人物造形論を覆している。

#### 参考文献

- Andrews, Malcolm. *Dickens on England and the English*. New York: Barnes and Noble, 1979.
- Axton, William F. *Circle of Fire: Dickens' Vision & Style & The Popular Victorian Theater*. Lexington: University of Kentucky Press, 1966.
- Brook, G. L. *The Language of Dickens*. London: Andre Deutch, 1970.
- Buchanan-Brown, John. *Phiz! Illustrator of Dickens' World*. New York: Scribner's, 1978.
- Butt, John and Kathleen Tillotson. *Dickens at Work*. London: Methuen, 1957.
- Carey, John. *The Violent Effigy: A Study of Dickens's Imagination*. London: Faber, 1973.
- Cockshut, A.O.J. *The Imagination of Charles Dickens*. London: Collins, 1961.
- Cohen, Jane R. *Charles Dickens and His Original Illustrators*. Columbus: Ohio University Press, 1980.
- Collins, Philip. *Dickens and Crime*. London: Macmillan, 1962.
- \_\_\_\_\_. *Dickens and Education*. London: Macmillan, 1963.
- \_\_\_\_\_, ed. *Dickens: The Critical Heritage*. London: Routledge and Kegan Paul, 1971.
- \_\_\_\_\_, ed. *Charles Dickens: The Public Readings*. Oxford: Clarendon, 1975.

- Coolidge, Archibald C., Jr. *Charles Dickens as Serial Novelist*. Amos: Iowa State University Press, 1967.
- Daleski, H. M. *Dickens and the Art of Analogy*. London: Faber, 1970.
- Davis, Earle. *The Flint and the Flame: The Artistry of Charles Dickens*. Columbia: University of Missouri Press, 1963.
- Dyson, A. E. *The Inimitable Dickens: A Reading of the Novels*. London: Macmillan, 1970.
- Ford, George H. ed. *Victorian Fiction: A Second Guide to Research*. New York: The Modern Language Association of America, 1978.
- Ford, George H., et al. *Dickens Criticism: Past, Present, and Future Directions: A Symposium*. Cambridge: CDRC, 1962.
- Gerson, Stanley. *Sound and Symbol in the Dialogue of the Works of Charles Dickens*. Stockholm: Almqvist & Wiksell, 1967.
- Gettmann, Royal. *A Victorian Publisher: A Study of The Bentley Papers*. Cambridge: Cambridge University Press, 1960.
- Goldberg, Michael. *Carlyle and Dickens*. Athens: University of Georgia Press, 1972.
- Harbage, Alfred B. *A Kind of Power: The Shakespeare-Dickens Analogy*. Philadelphia: American Philosophical Society, 1975.
- Harvey, J. R. *Victorian Novelists and Their Illustrators*. London: Sidgwick & Jackson, 1970.
- Hunt, John Dixon, ed. *Encounters: Essays on Literature and the Visual Arts*. London: Studio Vista, 1971.
- James, Louis. *English Popular Literature 1819-1851*. London: Allen Lane, 1976.
- James, Louis. *Fiction for the Working Man 1830-1850*. London: Oxford University Press, 1963.
- Kincaid, James R. *Dickens and the Rhetoric of Laughter*. Oxford: Clarendon Press, 1971.
- Lary, N. M. *Dostoevsky and Dickens: a Study of Literary Influence*. London: Routledge & Kegan Paul, 1973.
- Leavis, Q. D. & F. R. *Dickens the Novelist*. London: Chatto and Windus., 1970.
- Lohrli, Ann comp. *Household Words: Table of Contents, List of Contributors and Their Contributions*. Toronto: University of Toronto Press, 1971.
- Marcus, Steven. *Dickens: From Pickwick to Dombey*. London: Chatto and Windus, 1965.
- Miller, J. Hillis, and David Borrowits. *Charles Dickens and George Cruikshank*. Los Angeles: William Clarks Memorial Library, 1971.



- Oddie, William. *Dickens and Carlyle*. London: Centenary Press, 1972.
- Monod, Silvere. *Dickens the Novelist*. 1953. Norman: University of Oklahoma Press, 1968.
- Oppenlander, Ella Ann. *Dickens' All the Year Round: Descriptive Index and Contributor List*. New York: The Whitson Publishing, 1984.
- Partlow, Robert B., Jr. *Dickens the Craftsman: Strategies of Presentation*. Carbondale: Southern Illinois University Press, 1970.
- Patten, Robert L. *Charles Dickens and His Publishers*. Oxford: Oxford UP, 1978.
- Schwarzbach, F. S. *Dickens and the City*. London: Athlone, 1979.
- Slater, Michael, ed. *Dickens 1970*. London: Chapman and Hall, 1970.
- Slater, Michael. *Dickens on America and the Americans*. Sussex: Harvester Press, 1979.
- Solomon, Pearl Chester. *Dickens and Melville in Their Time*. New York: Columbia University Press, 1975.
- Spilka, Mark. *Dickens and Kafka: A Mutual Interpretation*. Bloomington: Indiana University Press, 1963.
- Steig, Michael. *Dickens and Phiz*. Bloomington: Indiana University Press, 1978.
- Stevenson, Lionel, ed. *Victorian Fiction: A Guide to Research*. Cambridge: Harvard University Press, 1964.
- Stewart, Garrett. *Dickens and the Trials of Imagination*. Cambridge: Harvard University Press, 1974.
- Stoehr, Taylor. *Dickens: The Dreamer's Stance*. Ithaca: Cornell University Press, 1965.
- Stone, Harry ed. *The Uncollected Writings of Charles Dickens: Household Words 1850-1859*. 2 vols. Bloomington: Indiana University Press, 1968.
- Sucksmith, Harvey Peter. *The Narrative Art of Charles Dickens: The Rhetoric of Sympathy and Irony in His Novels*. Oxford: Clarendon Press, 1970.
- Wall, Stephen, ed. *Charles Dickens: A Critical Anthology*. Harmondsworth: Penguin Books, 1970.
- Welsh, Alexander. *The City of Dickens*. Oxford: Oxford University Press, 1971.
- Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. London: Secker and Warburg, 1970.